

transmit program

2020

宮木亜菜 | Ana Miyaki

2018年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻 修了
(2018 MFA in Sculpture, Kyoto City University of Arts)

生活環境における私的要素と公共要素の関係性に重きを置いて制作をしている。特定の地に身を置く際に、周囲の環境や文化、あるいは人との関わりによって、からだと空間は変容する。それらの変化を、物質と身体との関わりによって、インスタレーションやパフォーマンスの形式で提示している。過去の制作では、生活空間そのものを粘土で作り出したり、習慣的行為から部分的な動作を抜き出して行ったパフォーマンスなどがある。

今回の作品では睡眠という行為に着目した。私にとって眠ることは容易いことではない。無抵抗な睡眠は私を不安にし、眠らなければならない時に眠ったふりをさせる。眠ったふりをしている間に眠ってしまうけれど、ものが動き、夜は夢の中で昼へと変わる。大きなカバのとなりで眠っていたこともある。私の夢はいつも昼間で、昼から朝へと目を覚ますから、ここがどこなのかわからなくなる。

睡眠は私的でありながら、意識の外に落ちていくという意味で私的な行為ではありえない。休息のための眠りは私にとっての不安であり、知らされた眠りは、知られていることをどこかで諦めていく。

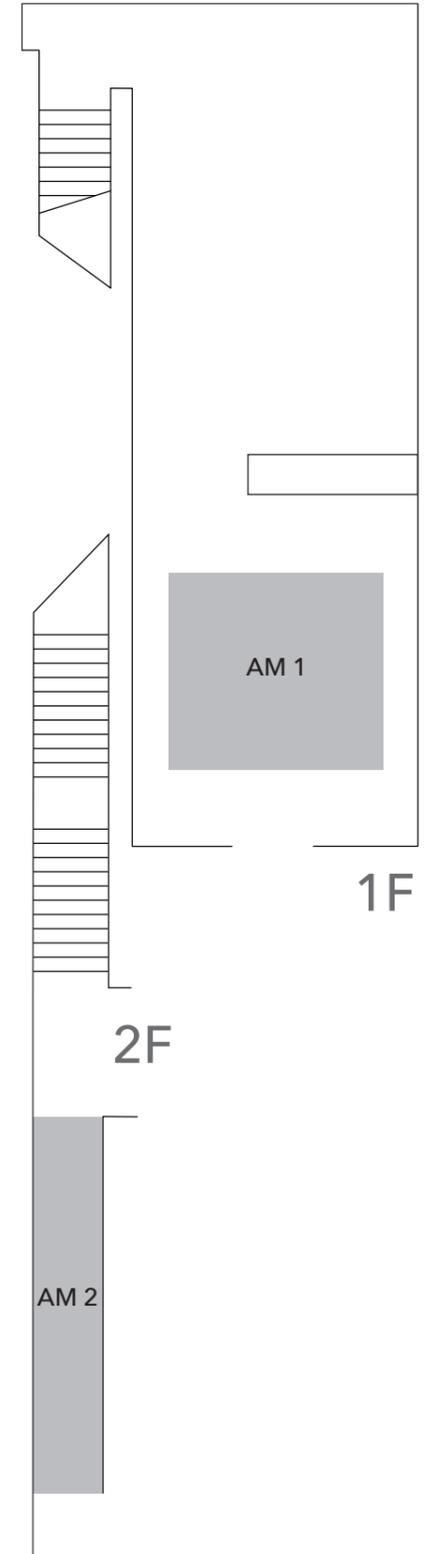
会期中、私を含めた数十人によるパフォーマンスを行う。「10人で同時に眠る」「身体を疲れさせる」「恋人と2人で眠る」「女性の集まり」「位置」「ひかり」「視線」「安心感」「夢への影響」など、日によって参加する人数や性別、ものの位置などが変わっていく、合計18日間のパフォーマンスを会期中の土日祝日に実施する。パフォーマーはいかなる状況の中でもただひたすら“眠る”ことを目的にそれぞれ動く。

AM1 眠りのあきらめ
2020
木材、布、綿、マットレス、鉄、カーペット

Acceptance of Sleep
2020
Woods, cloths, cotton, mattresses, iron, and carpets

AM2 行われなかったパフォーマンスに代わる記録写真
2020
撮影：前谷開

The documentary photographs,
as the replacement for the cancelled performance
2020
Photographs by Kai Maetani



小嶋 晶 | Aki Kojima

2019年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画 修了
(2019 MFA in Oil Painting, Kyoto City University of Arts)

看護師として働いてきた約十年間、人間の生死と絶えず関わってきた中で生まれた、アニメについての興味や関心が、私の創作の根源的意欲になっている。しかしそれは人智の及ばない対象のため、焦点はいつもぼやけている。そこで、多角的に辺縁をなぞることでその姿を捉えようとしてきた。

私にとって芸術活動とは、物事を捉えるための方法であり、共有するためのツールである。私の捉えた物事と、他者の捉えたそれは同じではないが、どちらも物事の一つの側面である。故に他者との関わりを通して、物事を捉え直していく必要がある。新しく見出した側面を「一つの事実」として視覚情報に還元する。こうして事実を積み重ねる事で見えるアニメの姿があると確信している。

AK1	自分になる 2019-2020 ミクストメディア	映像 Video Be me (インタビュー), 18分39秒 Be me (パフォーマンス), 43分43秒
	Be me 2019-2020 Mixed media	Be me (Interview), 18 min. 39 sec. Be me (Performance), 43 min. 43 sec.
AK2	bpm60 2020 ミクストメディア	映像 Video モニター(左), 7分50秒 / モニター(右), 7分50秒 プロジェクション, 27分27秒
	bpm60 2020 Mixed media	Monitor (left), 7 min. 50 sec., Monitor (right), 7 min. 50 sec., Projection, 27 min. 27 sec.

transmit program

2020

2020.4.4 Sat. – 5.17 Sun.

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

11:00–19:00 (月曜休館、5月4日(月祝)は開館)

主催：京都市立芸術大学

企画：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

会場設営協力

池田精堂、菊池なつみ、熊谷卓哉、熊野陽平、寺嶋剣吾

Venue preparation and installation supported by

Seido Ikeda, Takuya Kumagai, Yohei Kumano, Natsumi Kikuchi,
and Kengo Terashima

「京芸 transmit program」は京都市立芸術大学卒業・大学院修了 3 年以内の若手作家の中から、いま、@KCUA が一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトです。アーティストの活動場所として日本でも 1、2 を争う都市京都における、期待の新星を紹介するシリーズとして、毎年春に開催しています。今年度は、美術史を参照しながら、自作の装置や身体との関わりから「美術に特化した身体」のあり方を模索しつつ制作する菊池和晃（構想設計）、人間の生、性、愛について、ペインティングを起点としてさまざまなメディアを用い躍動的に表現しようとする小嶋晶（油画）、さまざまな文化的背景を持つ装飾的な新旧混交のモチーフを陶により象り、それらの再構築と再解釈を試みる西久松友花（陶磁器）、人の行動がその場の空間、環境などにもたらす変化や現象をパフォーマンスやインスタレーションで表現する宮木亜菜（彫刻）の4名が出展します。それぞれの瑞々しく力強い表現にご注目ください。

The annual KCUA Transmit Program features emerging artists selected from BFA, MFA, or PhD degree holders who graduated from Kyoto City University of Arts (KCUA) within the past three years. Through this program, @KCUA introduces artists emerging from the Japanese cultural capital and provides support for these artists throughout the school year (April to March). This year's artists are Kazuaki Kikuchi (2019 MFA in Concept and Media Planning), Aki Kojima (2019 MFA in Oil Painting), Ana Miyaki (2018 MFA in Sculpture), and Yuka Nishihisamatsu (2018 MFA in Ceramics).

菊池和晃 | Kazuaki Kikuchi

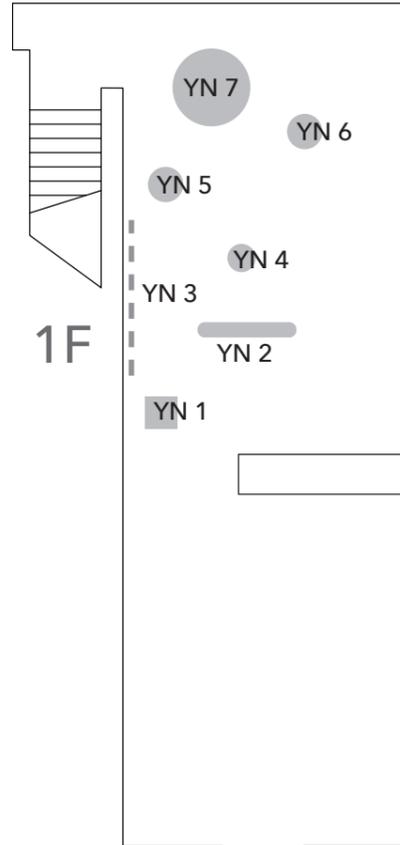
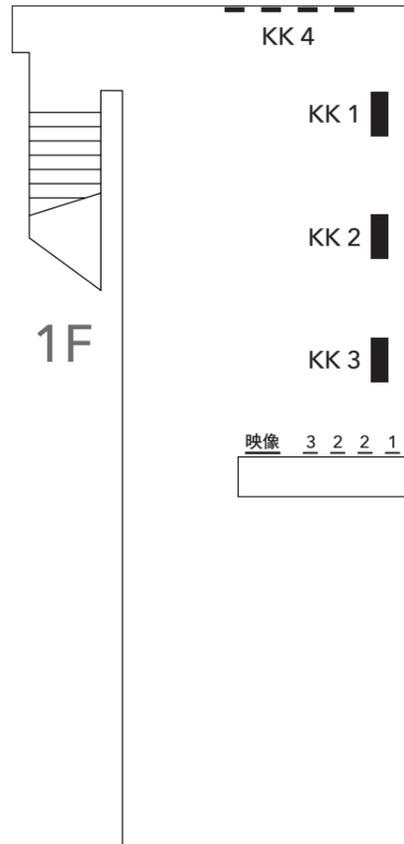
2018年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻構想設計 修了
(2018 MFA in Concept and Media Planning, Kyoto City University of Arts)

アートには僕たちが生きる上で必要な謎のパワーがあると以前は信じていました。しかし、結婚し子どもが生まれ日々生活をする中で、その謎のパワーはどこかへ消えていきました。それにも関わらず僕はアーティストとして活動を続けている。それはこの何の役にも立たないアートがなぜ何万年もの間、多くの人々に愛されてきたのかが気になって仕方がないからです。

僕たち人間とその他の動物との差を大雑把に言えば“道具を作る”ことだと言えます。古代の狩猟にしても現代のテクノロジーにしても僕たちが生きるのに道具は必要不可欠なものです。そしてなぜか人間はこの道具で絵を描いたり、石を彫ったりしてきたのです。現代ならまだしも、昔は生きることも困難であったはずなのに。もしかするとこの道具と身体が融合する日も近いかもしれない。そうなれば誰もが偉大なアーティストになることができるかもしれない。もし本当にそうなった時、アートなんてなくなっているかもしれない。そう考えたことが今作を作るきっかけでもあります。

今作ではハンドルを5の5乗の2倍の回数（6250回）回すことで一つの円を描くことができる。生きる為に必要な道具で生きる為に不要なアートを生み出す。連綿と続けられてきたその行為を増幅させるマシンです。僕たちはなぜアートを愛すのか、その理由に少しでも近づくことができればと思います。

KK1	円を描く#1 2019 アルミニウム、鉄、ステンレス、ペンキ	Draw a circle #1 2019 Aluminum, iron, stainless steel, and paint
KK2	円を描く#2 2020 アルミニウム、鉄、ステンレス、ペンキ	Draw a circle #2 2020 Aluminum, iron, stainless steel, and paint
KK3	円を描く#3 2020 アルミニウム、鉄、ステンレス、ペンキ	Draw a circle #3 2020 Aluminum, iron, stainless steel, and paint
KK4	円を描く#4 2020 アルミニウム、鉄、ステンレス、ペンキ	Draw a circle #4 2020 Aluminum, iron, stainless steel, and paint
映像	364分29秒	Video 364 min. 29 sec.



西久松友花 | Yūka Nishihisamatsu

2018年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程陶磁器専攻 修了
(2018 MFA in Ceramics, Kyoto City University of Arts)

兜や陣羽織、かんざし、身を着飾るものや銅鐸等の祭具、さらには花魁など“装飾的”と感じるさまざまなものをモチーフにし、私はこれまで「飾り」をテーマに作品制作を行ってきた。細かな意匠を施した巧みな装飾の数々に圧倒され、“目に映る一部一部を抽出して自分のものとして収集したいという欲求”が作品作りの源にある。

出品作《容れ物》は、青銅器から着想している。容器としての機能を持ちつつも、その容器の個々が持つ形に魅かれた。“丸っぽい形”“先が長い形”など言葉で言い表し易い特徴がある。青銅器を見た時に感じた印象と、自分の持つ色彩感覚や装飾表現を重ねあわせ、再構築、表現した。

1本ずつ願いをこめて結われたしめ縄にいつも畏怖感を抱く。見えないものへの恐れや人知の及ばぬ天災などに日々脅かされているなか、人は時に、形ないものに縋り、祈る。私たちの祈る対象は、形あるものや形ないものに関わらず、確かに“何か”に向けられていて、そこに人智を超えた大きな存在を意識してしまう。「祈祷縄」は自らの縋れる拠り所としての役割を果たす。

YN1	緋華飾 2019 磁器土、釉薬、金銀彩	<i>Akehashoku</i> 2019 Earthenware, glaze, pigments of gold and silver
YN2	祈祷縄 2020 陶土、釉薬、金銀彩、顔料	<i>Kitonawa</i> 2020 Earthenware, glaze, pigments of gold and silver, and paints
YN3	結(紙垂、松竹梅、松、鶴、宝船、俵) 2018 磁器土、釉薬、金銀彩	<i>Yui (shide, shochikubai, matsu, tsuru, takarabune, tawara)</i> 2018 Porcelainware, glaze, pigments of gold and silver
YN4	廻 2020 磁器土、釉薬、金銀彩、スワロフスキー	<i>Kai</i> 2020 Porcelainware, glaze, pigments of gold and silver, and Swarovski crystal
YN5	鏡 2019 磁器土、釉薬、金銀彩、スワロフスキー、ステンレス	<i>Kagami</i> 2019 Porcelainware, glaze, pigments of gold and silver, Swarovski crystal, and stainless steel
YN6	虚飾 2020 磁器土、釉薬、金銀彩、組紐	<i>Kyoshoku</i> 2020 Porcelainware, glaze, pigments of gold, silver, and braided cord
YN7	容れ物 2020 磁器土、釉薬、金銀彩、組紐	<i>Iremono</i> 2020 Porcelainware, glaze, pigments of gold and silver, and braided cord